

主 題：教会に託された責任

聖書箇所：コリント人への手紙第一 6章1-11節

この2回ほどIコリント5章から、教会の中の罪と、その罪を平気で犯し続ける者たちに厳しく対応しなければならないということを学んできました。一見、それは愛のない冷たい行為のように見えるかもしれませんが、その本当の理由は、その人たちが本当に永遠の救いを自分のものとしているかどうかを知るために必要なことであり、そのことを教会が正しく理解し、実践して行かないと、教会が神のものでありこの世に神のご性質を伝えるという証ができなくなってしまうのです。2000年前のコリント教会がまさにそのような状態でした。罪を罪として正しくさばき、その都度きよめて行くことがなかったために、教会の中は問題だらけでした。この世の中に神の証を伝えるどころか、当時、悪名高かったコリントの町よりも淫らで、様々な罪に対して放縱な集まりであったのです(5:1-2)。

そのような教会に魅力があるでしょうか？教会の中にいくつものグループがあって、お互いが反目し合っている(1:11-12)、お互いの中にねたみや争いがあることで少しのことにも過敏に反応してしまう(3:3)、多くの人が自分を誇って(4:6-7)、教会の様々なことも自分のプライドのために利用しようとする(5:2)、それがコリント教会の状態でした。

また、このような教会に行きたいと思いませんか？そこにいるクリスチャンを見てクリスチャンでない人が、きよく正しい、愛とあわれみに満ちた神を知ることができるでしょうか？否です。ですから、教会は教会内で起こっている問題に対して決して無関心であってはならないのです。

6:1-11「あなたがたの中には、仲間の者と争いを起こしたとき、それを聖徒たちに訴えないで、あえて、正しくない人たちに訴え出るような人がいるのでしょうか。:2 あなたがたは、聖徒が世界をさばくようになることを知らないのですか。世界があなたがたによってさばかれるはずなのに、あなたがたは、ごく小さな事件さえもさばく力がないのですか。:3 私たちは御使いをもさばくべき者だ、ということ、知らないのですか。それならこの世のことは、言うまでもないではありませんか。:4 それなのに、この世のことで争いが起こると、教会のうちでは無視される人たちを裁判官に選ぶのですか。:5 私はあなたがたをはずかしめるためにこう言っているのです。いったい、あなたがたの中には、兄弟の間の争いを仲裁することのできるような賢い者が、ひとりもないのですか。:6 それで、兄弟は兄弟を告訴し、しかもそれを不信者の前でするのですか。:7 そもそも、互いに訴え合うことが、すでにあなたがたの敗北です。なぜ、むしろ不正をも甘んじて受けないのですか。なぜ、むしろだまされていないのですか。:8 ところが、それどころか、あなたがたは、不正を行なう、だまし取る、しかもそのようなことを兄弟に対してしているのです。:9 あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、:10 盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。:11 あなたがたの中のある人たちは以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」

教会に与えられた責任とは？

今日の箇所でパウロは「教会にはどのような責任が与えられているか」ということについて教えています。私たちがそのことをしっかり理解しないなら、私たちは自分も教会の一員として、何を考え、何を優先して生きるべきかがぼやけてしまうばかりか、この世にあっても正しく神を証できないし、教会が進んで行こうとする目標が見えなくなって、いろいろなことに失望したり、批判的になってしまったりするからです。私たちが教会の一員として、また、救われた者として、神のみこころを知ろうとしている者として、教会に与えられている責任について無関心であってはいけないし、それを軽んじてはいけません。

I. 権威を用いて教会を治める 1-3節

まず初めに私たちが覚えるべきことは、教会はしっかりと権威を用いて教会を治めなければならないということです。

◎コリントの教会で起こっていた問題とは？

恐らくは金銭がらみの問題でしょう。6:1-11を見ると、教会のメンバーどうしが訴え合っていることが取り上げられています。どのような問題であったか詳しくは書かれていないのですが、6:7-8の「不正を受ける」「だまし取る」という表現や、5:10-11に「それは、世の中の不品行な者、貪欲な者、略奪する者、偶像を礼拝する者と全然交際しないように」という意味ではありません。もしそうだとしたら、この世界から出て行かなければならないでしょう。:11 私が書いたことのほんとうの意味は、もし、兄弟と呼ばれる者で、しかも不品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそしる者、酒に酔う者、略奪する者がいたな

ら、そのような者とはつきあってはいけない、いっしょに食事をしてもいけない、ということです。」と書かれてあることから、恐らく金銭に関する問題であったと思われます。この「略奪する者」は前回にも見たように法に触れる行為です。本来なら、法によってさばかれ交わることもできないはずですが、明確に、法に触れていなくても、結果として人のものを奪うような行為を言っているのでしょう。7節に「不正を受ける」とありますが、これは「不正を行なう」とか「損害を与える」という意味です。

◎ここでパウロが問題としていることは何でしょう？ 1、6節

教会員どうしの問題を教会外で争っていたこと。教会内で分裂・分派を引き起こして教会に混乱を招き、さばくべき不品行の罪を平気で無視しながら、他方、裁判を起こしてでもある人をさばき、問題を解決しようとする、これが当時のコリント教会の姿だったのです。おかしいことですが、これは私たちの日常でも起こることです。周りでいろいろな問題が起こっていても、自分さえいやな思いをしなければ寛容でいられる、自分に直接被害が及ばなければ無関心ですまそうとする。悲しいことですが、人間にはそのような一面があります。「自分さえよければ…」と。ところが、ひとたび自分に被害が及ぶと、ほんの小さなことさえも赦せず、人を責めてしまいます。これこそが聖書が示す私たちの内にある「罪」です。個人の内にある罪が全く矯正されず、そのまま教会全体に及んだ姿、それが当時のコリント教会でした。教会のメンバーの多くが自己中心だったのです。そのような罪の結果である「不利益」や「被害」ではなく、罪そのものを問題にするべきだったのです。

◎当時のコリント教会はどうするべきだったのでしょうか？

教会の中で正しくさばく必要があった。教会は教会内の罪を監視し、教会の中で正しくさばく必要があるのです。それなのに、当時のコリント教会のメンバーは、教会内ではなく、世の機関に訴えようとしたのです。そのようなことが頻繁にあったのでしょうか。1-11節は、非常に特徴のある箇所です。多くの疑問文があります。1-9節の間にはギリシャ語の原文を見ても、実に10箇所もの疑問文があるのですが、これらは単なる疑問文ではなく、パウロの強い反発を反語で表わしていると考えられます。

◎罪をさばくために教会には何が与えられているのでしょうか？

責任と権威です。パウロは1章に書かれてあるように、クロエの家の者からコリント教会の実情を聞いて、そのことをここで訴えているのです。教会には特別の責任が与えられていると。それが、パウロが5章で訴えていたことでもあります。教会には教会の中で起こる問題を正しくさばくという責任が与えられているのです。言い換えれば、教会にそのような「権威」が与えられているということです。そして、パウロは教会（＝救われた聖徒たち）には、いずれ、この世界だけでなく、御使いをもさばくような大きな権威が与えられることを教えるのです。パウロは「世界」（2節）と「御使い」（3節）ということばを挙げています。恐らくこれは後に起こる千年王国のことであると考えられます。このことに関するみことばをいくつか見ましょう。黙示録20：4-6「また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行なう権威が彼らに与えられた。また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。：5 そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかつた。これが第一の復活である。：6 この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。」。ルカ19：16-19「さて、最初の者が現われて言った。『ご主人さま。あなたの一ミナで、十ミナをもうけました。』：17 主人は彼に言った。『よくやった。良いしもべだ。あなたはほんの小さな事にも忠実だったから、十の町を支配する者になりなさい。』：18 二番目の者が来て言った。『ご主人さま。あなたの一ミナで、五ミナをもうけました。』：19 主人はこの者にも言った。『あなたも五つの町を治めなさい。』。Ⅱテモテ2：12「もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。もし彼を否んだなら、彼もまた私たちが否まれる。」。聖徒たちが、やがては「治める者」となることが教えられています。ここでパウロは、私たちクリスチャンが未来において、世界や御使いまでさばくような者であることを訴えて、だから、今教会内の些細な問題くらい自分たちでさばく必要があるのだと教えているのです。

かつては自分の罪ゆえに滅ぼされる運命にあった私たちに、「さばく」＝「支配する」という大きな権威が与えられているのです。ギリシャ語の「さばく」ということばは「判断する」ということばの同義語でもあります。私たちはどのような人が救われて、どのようにすれば救われて天に行けるのかというその方法をはっきり知っています。それを知っているのは私たちクリスチャンだけなのです。神が救いに至る道を備え、それを私たちに示してくださったから、私たちは救われたのです。イエスの大きな犠牲があったからです。

◎これらのことはだれに対して書かれているのでしょうか？

一部の人たちだけでなく、教会全体に対してです。Ⅰコリント1：2に「コリントにある神の教会へ。すなわち、私たちの主イエス・キリストの御名を、至る所で呼び求めているすべての人々とともに、聖徒として召さ

れ、キリスト・イエスにあって聖なるものとされた方々へ。」とあるように、コリント教会の人たち全員です。5、6章には「あなたがた」ということばが26回も使われています。教会の牧会者や役員という一部の人たちではなく、教会員全体が対処するように教えられているからです。私たちは教会にそのような権威が与えられていることを正しく認め、それに協力して行くべきなのです。私たちは神が託してくださっている教会を正しく、みことばをもって治めて行く必要があるのです。そして、教会内の問題を軽々しく教会外で話したりしないことです。たとえそれが家族であってもです。

ある面でコリント教会は分裂の危機にあり、教会員たちが皆、自分のことばかりに関心があったから、教会が全体として正しい対処をなすことができないので、その結果として、問題ばかりで証を失ってしまった教会になってしまっていたのです。

II. みことばを用いて教会を治める 4-5節

教会には罪をさばく「権威」とともに、そのさばきに必要な「知恵」も与えられています。教会に与えられている第二の責任は、みことばを用いて教会を治めることです。

◎本当の知恵はどこから来るのでしょうか？

それは神から来ます。5b節「**いったい、あなたがたの中には、兄弟の間の争いを仲裁することのできるような賢い者が、ひとりもないのですか。**」とパウロがいうのは、事実はそうではなく、コリント教会にはそのような問題（争い）を仲裁できる者がいるはずだと訴えているのです。実際、コリント教会には「教える」賜物を持った人が与えられていました。アポロがそうでした。教会に必要な賜物は必ず神が備えてくださっています。ここで「賢い」と訳されていることばは「知恵」のことですが、コロサイ2:3にはこの「知恵」についてこのように教えています。「**このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。**」また、ヤコブ1:5には「**あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。**」とあります。ほんとうの知恵は神が与えてくださるものなのです。

◎また、その知恵とはどのようなものなのでしょうか？

神からの知恵、本当の知恵とは「みことば」です。それは私たちクリスチャンすべてに与えられています。IIペテロ3:15-16には「**また、私たちの主の忍耐は救いであると考えなさい。それは、私たちの愛する兄弟パウロも、その与えられた知恵に従って、あなたがたに書き送ったとおりです。:16** その中で、ほかのすべての手紙でもそうなのですが、このことについて語っています。その手紙の中には理解しにくいところもあります。無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の箇所のことばあいもそうするのですが、それらの手紙を曲解し、自分自身に滅びを招いています。」とあります。この少し前1:19-21を見ましょう。「**また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。:20** それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。:21 なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。」とあるように、今私たちの手元にあるこの聖書（＝みことば）こそが、神からのことばであり、神が私たちに与えてくださった神の知恵なのです。

私たちは教会を正しく治め導いて行く責任が与えられています。しかし、それは人間の知恵によってではなく、このみことばによって為して行かなければならないのです。だから、私たちはみことばを学び、その教えられた原則によって教会を治め導いて行くのです。様々な問題に対してもみことばを適用し、人間の方法ではなく、神の方法によって解決して行く必要があるのです。神の知恵、神の方法こそが最善なのです。教会は神の所有物だからです。

コリント教会にもみことばは与えられていました。イエスの教え、弟子たちの教え、そして、パウロの教えが語られ、また、教える賜物を与えられた人たちがいたのです。Iコリント1:5に「**というのは、あなたがたは、ことばといい、知識といい、すべてにおいて、キリストにあって豊かな者とされたからです。**」とある通りです。神は必ず必要な賜物をもった人を与えてくださるはずで、12:28-29「**そして、神は教会の中で人々を次のように任命されました。すなわち、第一に使徒、次に預言者、次に教師、それから奇蹟を行なう者、それからいやしの賜物を持つ者、助ける者、治める者、異言を語る者などです。:29** **みなが使徒でしょうか。みなが預言者でしょうか。みなが教師でしょうか。みなが奇蹟を行なう者でしょうか。**」、教える賜物である「教師」がいたのです。この世の知恵をどれほど蓄えていようと、神の知恵によって問題を判断できない人を裁判官として、また、教師として選ぶべきではないのです。最高の知恵がコリント教会にも、私たちにも与えられているからです。

III. 何よりも神の評価を求める 6-11節

最後に、教会に与えられた責任は「神の評価を求めてすべてのことを為して行く」ということです。

◎コリント教会の一番の関心は何だったのでしょうか？

実は、この当時、ギリシャ人の中で「訴訟問題」というのは、かなり身近な問題でしたが、ユダヤ人にとってはそうではなかったのです。なぜなら、彼らにはしっかりと神の律法があり、村や会堂には長老たちがいて、彼らの問題の多くをさばいたからです。当時のユダヤの律法には、ユダヤ人以外の法廷に問題を訴えることを禁じている教えがあったようです。コリント教会は大部分がギリシャ人でしたから、ギリシャ的な訴訟を好む傾向にあったのです。当時、アテネでは最高6000人も陪審員を使う大事件の裁判もあったようです。また当時、公定仲裁人（60歳以上の市民から）に選ばれた場合、その義務を果たさないときは市民権を剥奪されてしまったほどです。コリント教会が自分たちの方法で問題解決を図ろうとしたことは想像できることですが、パウロは果たしてそれが良いことなのかどうかとコリント教会の人たちに問うているのです。教会内の問題は教会内で対処すべきであって、世の機関にその判断を任せべきではない、というのが聖書の教えです。

しかし、ここで考えるべきことは、法に触れる犯罪の裁判までは教会に与えられていないことです。ローマ13：1-7「人はみな、上に立つ權威に従うべきです。神によらない權威はなく、存在している權威はすべて、神によって立てられたものです。2 したがって、權威に逆らっている人は、神の定めにもむいています。そむいた人は自分の身にさばきを招きます。3 支配者を恐ろしいと思うのは、良い行ないをするときではなく、悪を行なうときです。權威を恐れたくないと思うなら、善を行ないなさい。そうすれば、支配者からほめられます。4 それは、彼があなたに益を与えるための、神のしもべだからです。しかし、もしあなたが悪を行なうなら、恐れなければなりません。彼は無意味に剣を帯びてはいないからです。彼は神のしもべであって、悪を行なう人には怒りをもって報います。5 ですから、ただ怒りが恐ろしいからだけでなく、良心のためにも、従うべきです。6 同じ理由で、あなたがたは、みつぎを納めるのです。彼らは、いつもその務めに励んでいる神のしもべなのです。7 あなたがたは、だれにでも義務を果たしなさい。みつぎを納めなければならない人にはみつぎを納め、税を納めなければならない人には税を納め、恐れなければならない人を恐れ、敬わなければならない人を敬いなさい。」、1ペテロ2：13-17「人の立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、14 また、悪を行なう者を罰し、善を行なう者をほめるように王から遣わされた総督であっても、そうしなさい。15 というのは、善を行なって、愚かな人々の無知の口を封じることは、神のみこころだからです。16 あなたがたは自由人として行動しなさい。その自由を、悪の口実に用いないで、神の奴隷として用いなさい。17 すべての人を敬いなさい。兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を尊びなさい。」。パウロも実際に、時の政府に訴えて、ある時には救助を求めたり、ある時には時のローマ皇帝カイザルに上告したりしています。

6：2に「…ごく小さな事件さえもさばく力がないのですか。」とありますが、教会内でしっかり罪を吟味して「教会戒規」を行なっているなら、大きな問題は起こらないはずで、神を知らない人にゆだねることの愚かさをパウロは言っているのです。ここでパウロが強調していることは、教会内で神の前に喜ばれる正しいさばきをしなさいと言うことです。私たちはともすれば、神が知ってくださる以上に、他人に自分の正当性を理解し評価してもらいたいと願ひ、それがなくなるとがっかりしてしまいます。当時のコリント教会の人たちは、人の評価を優先し、自分の権利や損得が、神がすべてを知ってくださっていること、世に対する証よりも重要だったのです。

確かに、コリント教会の一部の人たちは9-10節にあるように「不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、10 盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者」であったのでしょう。しかし今は、そのような者たちが神によって変えられたのです。11節に「しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」とあるように、私たちは、主イエス・キリストの支払ってくださった大きな贖いと聖霊の働きのゆえに、完全にきよい者へと変えられたのです。(1)「洗われ」(2)「聖なる者とされ」(3)「義と認められた」ということばにはそれぞれ意味がありますが、かつての私たちと大きく変えられたということなのです。

かつての私たちは、コリント教会と同様、様々なこの世での評価や待遇を第一に考えて生きていたかもしれません。しかし、今はどうでしょう？皆さんは、自分の損得以上に、神が喜んでくださること、神の御名が誉め称えられることを願っておられますか？私たちの日々の歩みが真に神に喜ばれるものであるように祈ります。